

春色傳家迺卷  
三編

^ 13  
2926  
3





13  
2926  
3

昭和九年  
七月六日  
終末

傳家心三編序

八代将軍の佳いものち合巻は其の終り

難持の下の強きもの道具なるものありて

よのてささむるもの小説揮毫の馬場の介讀

人ありて其の推しを明烏より二十

海軍國體の中本流のありて生か











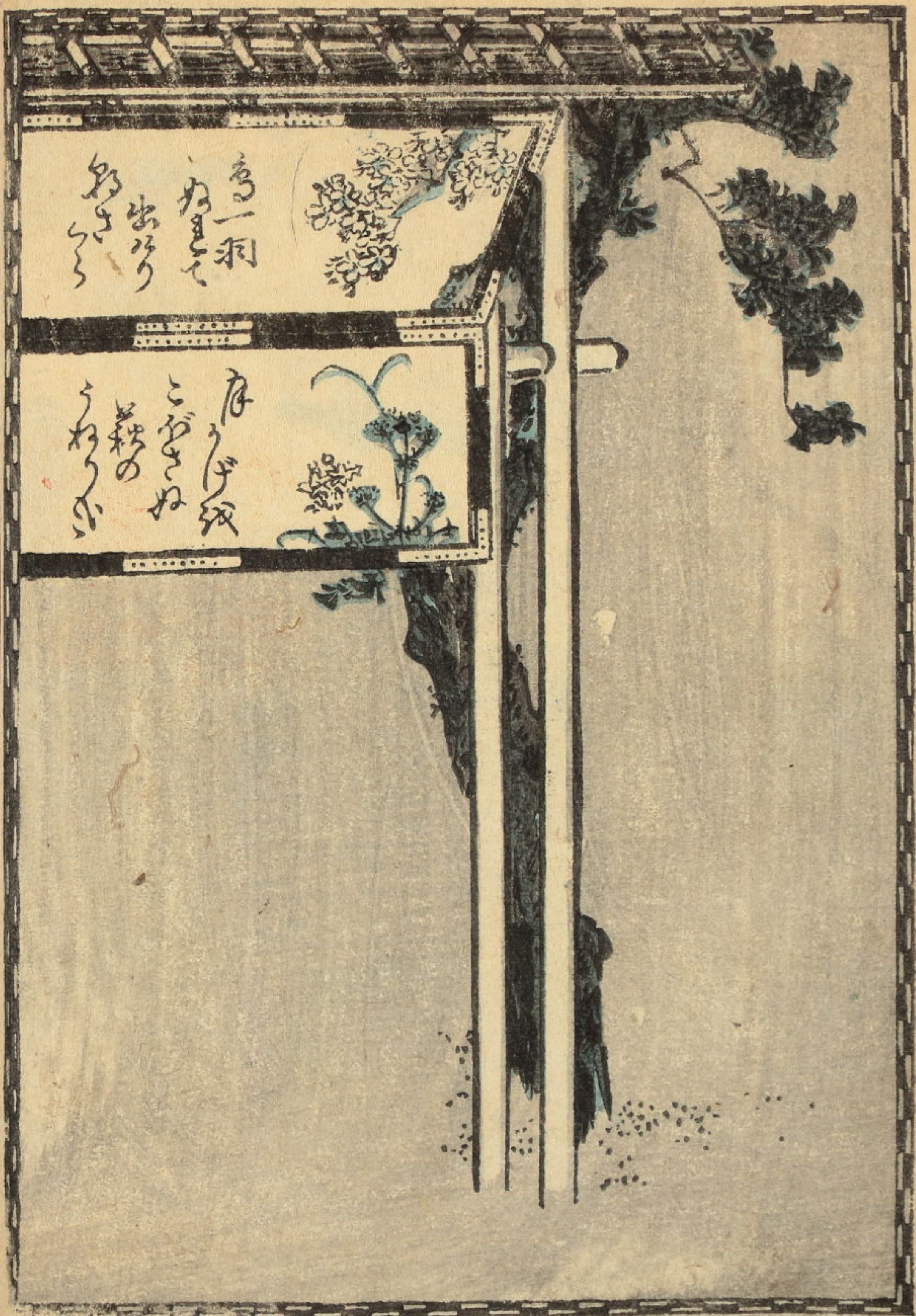


長谷寺の奥山殿昌の園



山吹の紙  
出さず  
春里





春色傳家の花

卷之七  
江戸蔵書

鳥永春水著

第十三回

愛の王さま 素生は尋ねて 鎌倉の大河を越て 東の方  
 園之の面を町より 所ふ最ふ園母子あり 母は活業  
 のも新為ふ土人形を細工で 娘もお目を見まへ 猫の形  
 朧の形をんとて 七支八支の頃より 一と一 覚へ 寛み  
 のの 價の道とも 母の活業の 助と 知経の いかせ



道所の子供が誘引のまきも十度ほど一度おつたなり  
外面は格別綺麗にして只の女母親の側をたもてるを孝  
行といふ教も同様に自然と親をたもつるのみさし度  
なまらしくも電くらけき 玉へ母人さん 昨日の横の未  
干のひらり傘をさるひねりお茶のら〜と人形を舟川  
戸の同金へ持てゆふ久 母へナニテ 熊ヨとて亦けりおの極  
途中で他所の子のふ騷まるをゆふひらり 誰ぞを所の叔  
母さんが後にお彼土地の方へゆふらうらう 幸時同伴の

ゆふゆふ 玉へアイ夫とて今月お土がまひら 所をとお休め  
まで三味線をを教ゆゆても能久 母へ松ともさう〜又  
お客さんでもお出の振るふお邪子ぬまるをゆふひらり 現  
ひて見て然るるふ直にお帰りのヨ 玉へアイト返るのも温順く  
長家の奥の方へゆ折らう向ふの栄の戸を内より開き  
て出る女 幸へアヤ〜お玉さん 枕背古にお出ろ今松とてお茶を  
ゆふゆふ 所へゆ 玉へ然久今月お客さんぬひらひの〜  
お新遣さぬお一人でお淋〜がらそぬら入らま故お茶を

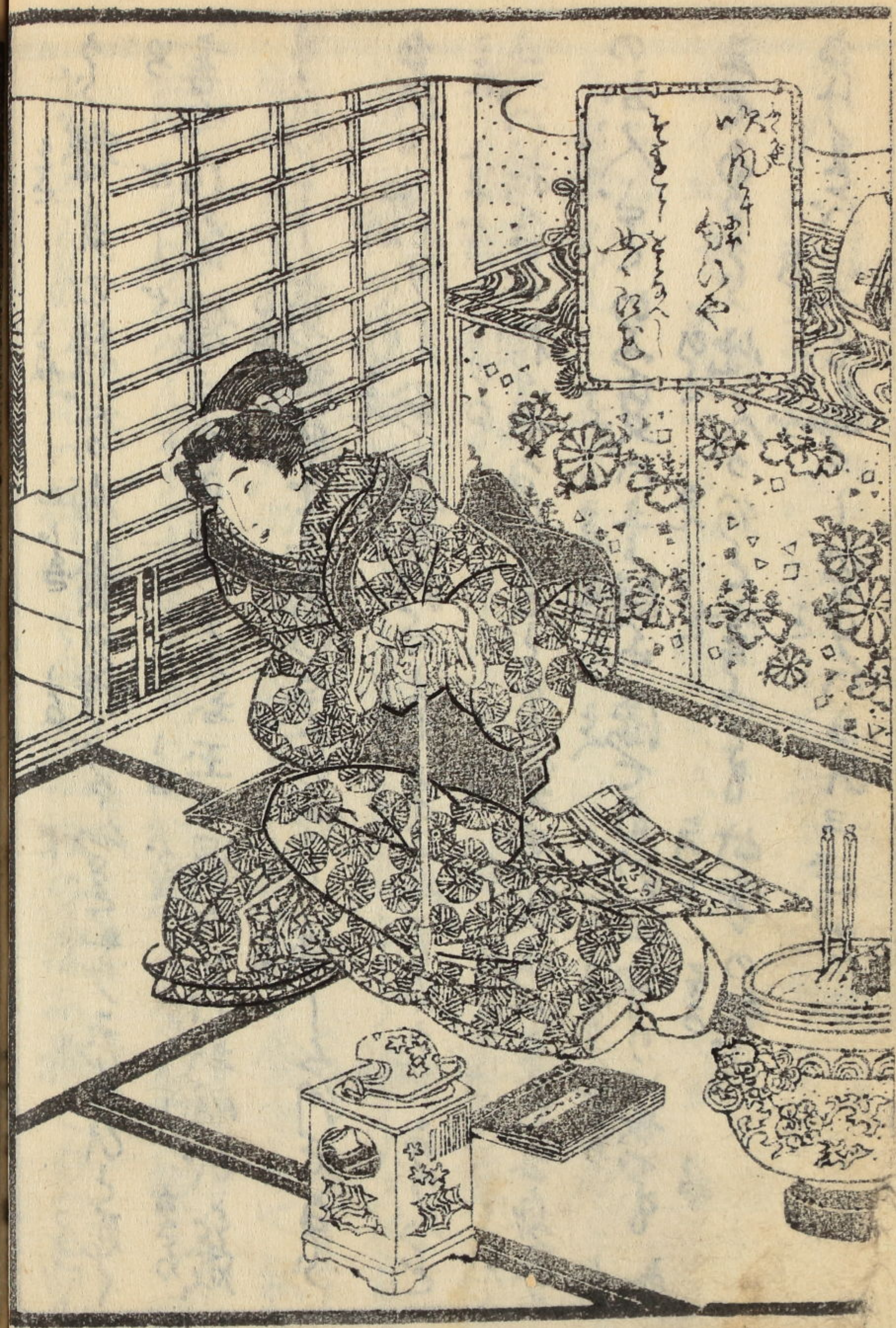
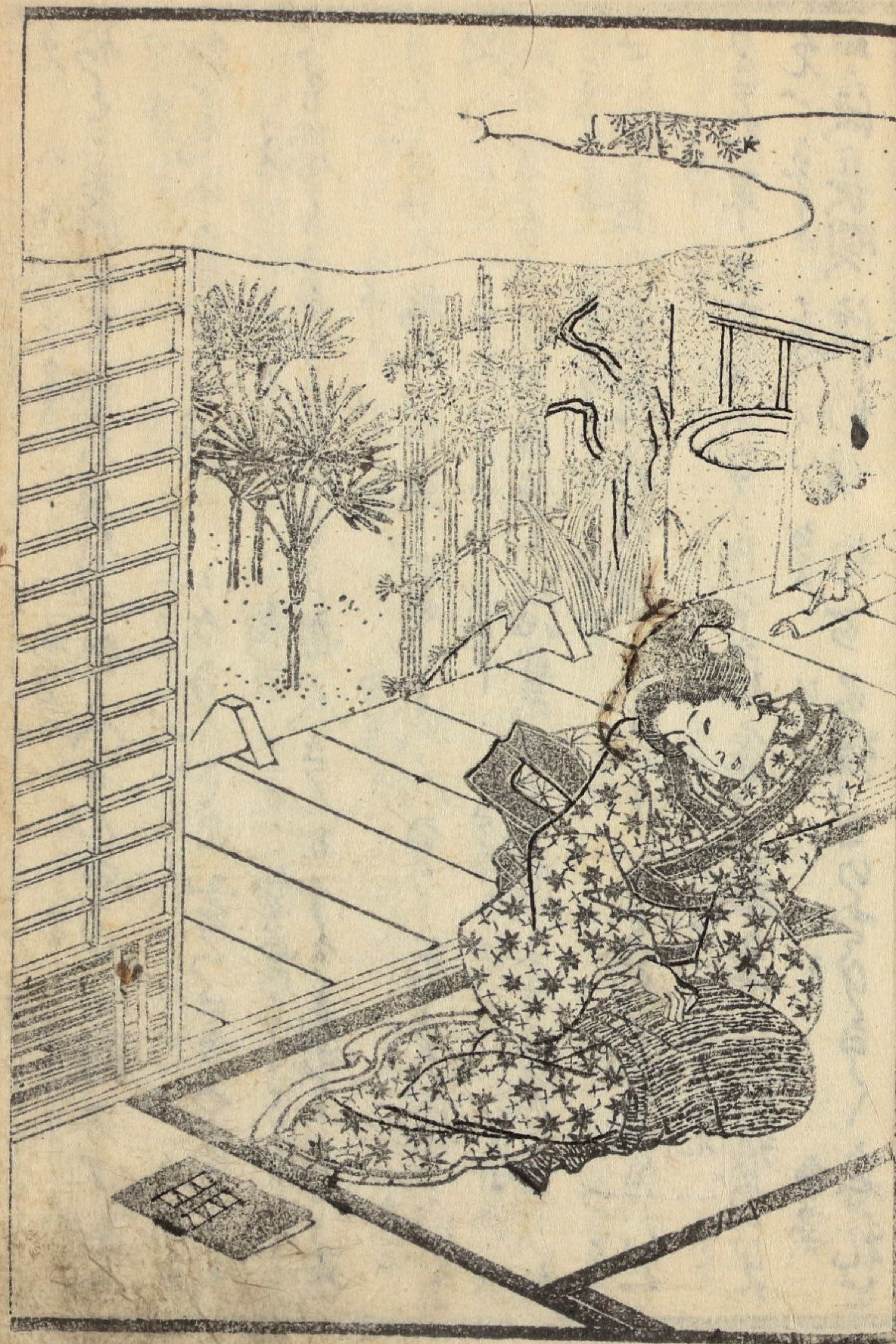


















借集あも着せてもか玉と連なり祝言を著るせる極よ世  
信をかりけさる行先くの評判よく漸くふ別條も増せ  
程多く衣敷の着替時々の衣服常に外袴伴  
具のまもおきておまてゆへ扇身が廣くあらと思ふべのと様  
姫も心の人もおまてゆへ扇身が廣くあらと思ふべのと様  
宮儀のりりく人の目につく調へて都て姫も人々も  
おまて彼と禱る人多く或日お玉が姫も入て他行も  
帰るまのりりか我より先へまてお四入人連資後よりお玉が

来るよりをあらうくおまて當りの相しあらもみりよあつら  
おまもお玉の隣長を又ハ踏次口長長をの切りお住  
居の女房嬢ハアラウけ節ハ猫娘が丈壯ハ他見様で  
おまのりりハ猫娘とる味の悪ハお節の踏  
猫が邪祟あても居るのうまへハアサおまかの悪ハ元  
女どりり土人形屋の娘ハハマお故お小女のりりを猫  
おまのりりのハアサお小女ハおまを御まも御人おまを  
おの猫もろり細工で居てアチハマウ史故猫娘のりりの







お師通さんト申すお玉ッ子の三味線もあつひやうする  
あまのこころヲ。ナニサ彼玉子の彈きひでも執か人どが  
運で終のころ買らふ。×ハおお達へ何が迷恨が  
あつちあつちまのが大變ふ悪く言ふノヲ。ナニ何も遺  
恨のまのが人といふの人身分の相違があらテその  
兎女が此節の夜更を見せるせし腰の横の母人が一文  
人形をとりて人ノ残で出まると思ふく不殘他人ふと一  
らして其ののころうじやまの亦産後にはあつちとつ

ても何程祝をせ貫はするものもさ事も氣あも思つ  
くらかのお産敷もく正然のまのまの産人をばらふ  
おやうなるひの×アノお玉ッ子の貳葉くらなるものうノ一武  
も茶の花菱が茶葉まが産有るひのナニ然成りのまの  
十度ハ一度サ大概小お茶の結裂くらなるものご  
×ハアヤクも位なるて何程と如彼まの衣裳が  
まののりま。ハサま板ごうも氣様ごらふとやうの  
何程の産らるるひをちて居まがも産流の衣服も













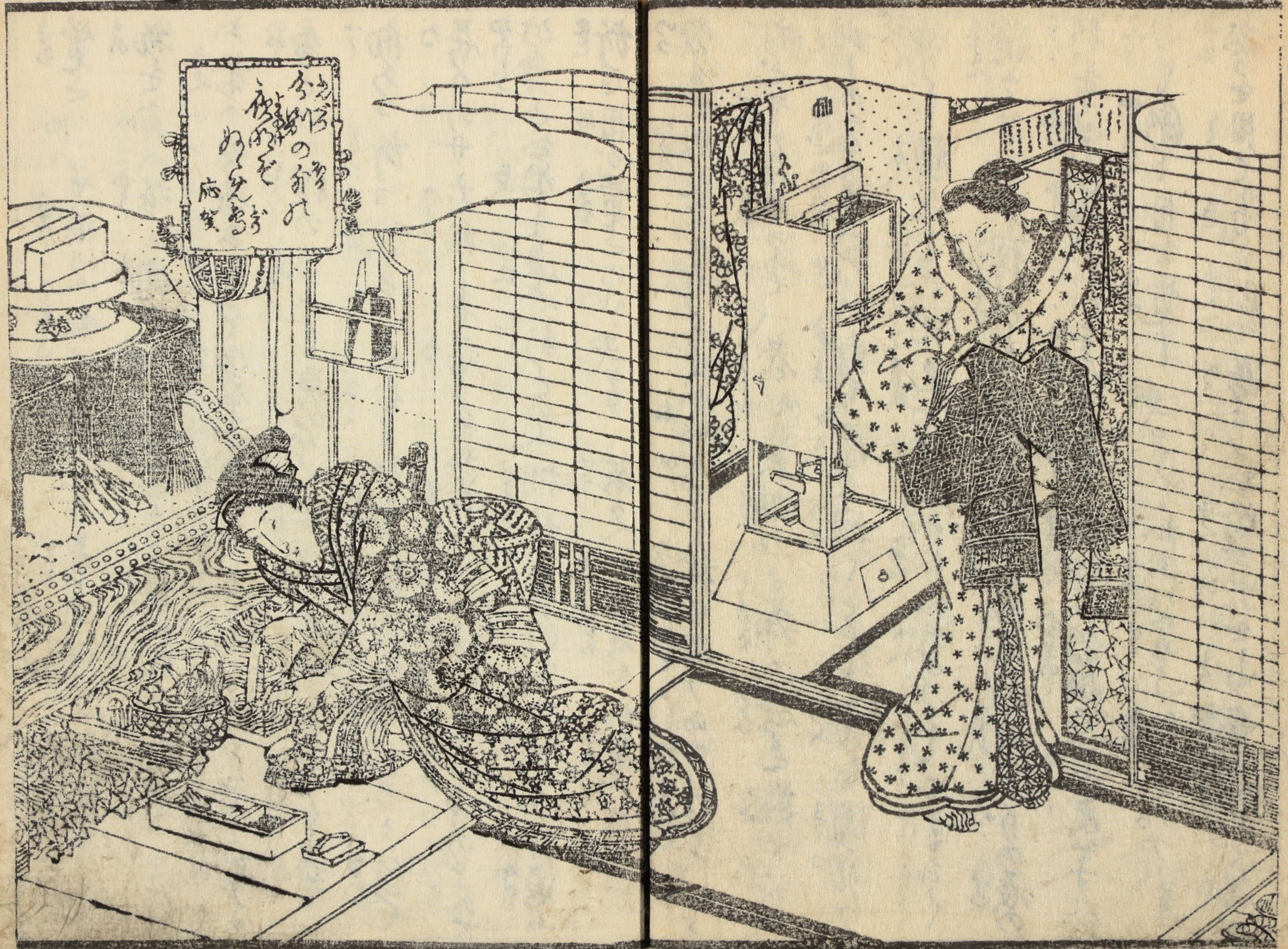


ゆきおろそあつし思ひはしし類もあつし  
人がいへく〜  
目もあつし

諸もあつし  
の〜  
番と喰ひあつて家小降り子夜母もあつし  
眠てふ付てもいづく寐入極もあつし  
思ふ業と極もあつし

芳も思ひあつし  
わど〜  
あ〜  
ゆ〜  
清〜  
列〜  
母もあつし  
夢もあつし





今宵の介れ  
夜更の  
ねんを  
宿実







お屋のまが好美を養ふとりの料所やの主人を易く  
出入して養ふのあつ娘を抱へ不便を加へ養ふより一  
知まらば率由世の乃ふま家へ養ふ格よと初めは  
母親も相成を遂ぞ一年余り母を養ふ格のま  
當の金を借と率由も短く好美を養ふ家の  
養ひはまん養ひはせん

昔漢王宋の代に紀氏の人の五月八日の延生の子を  
馬橋ひて野屋に捨たり

趙氏の女房が拾ひよそ肩一が七女八女の頃ありて実  
の親達が折々尋ねあつてまゝ子小向ひて汝の親ありと家  
度も言ひ一四一まゝ子這を継母の養を圓が趙氏の養  
かも隠さず胎終の分解をいひ徳をけりまは後を院して  
これと圓けのが實の親の方も継母の方も養ひしるま  
けいばまゝ子紀遠とりのまゝありし十二三女の養ひし  
人の備へては養ひしるまゝ子一と實の母の養ひしるま  
二と養ひの母の養ひしるまゝ子一と實の母の養ひしるま







家よりおとせのやうなことも 昨日暴く我身へ死するが  
 趙氏の母子が慈悲深きと考かゝるに依ては身命をも  
 延して紀邁お活返ささるるより早くその苦を神祇  
 の教に依て之をまをさるゝといふを思へば爰覺る母  
 子とも不思儀ありると思ひ周章して衛氏の方へ移て  
 見直ぐ娘の死して家早穢の中へ納りてあり 既小寺へ  
 送らんと考るを止む爰の苦を苦て棺をひきまけ直ぐ  
 娘の息を吹返して獲生りて親も亦兼遠を伴て

紀邁とま輝ふせが母子ま輝膝まゝく長命のて殊  
 の福人ともいふ人しをもは其縁を思ひありせを考初め  
 徳あるのを尊く別て後親め考初めを奉りて奉り玉へり

春色 家のひし志之七了

春の暮て入らる



記しるが

春色傳家能花卷之八

江戸 為永春水著

第十五回

長谷寺観音の境内の妙音院といふ地中あり其寺の  
 内廣げまはば貸家成多く建つらねて種々の者の住居  
 中へ昔々在りと言はれり彼一軒家の鬼老女の勝つて博  
 女ありけり案頭三十一二女を顔うらちも並勝れ近  
 頃茶店を出し山の内での客多しの物の中に入ら







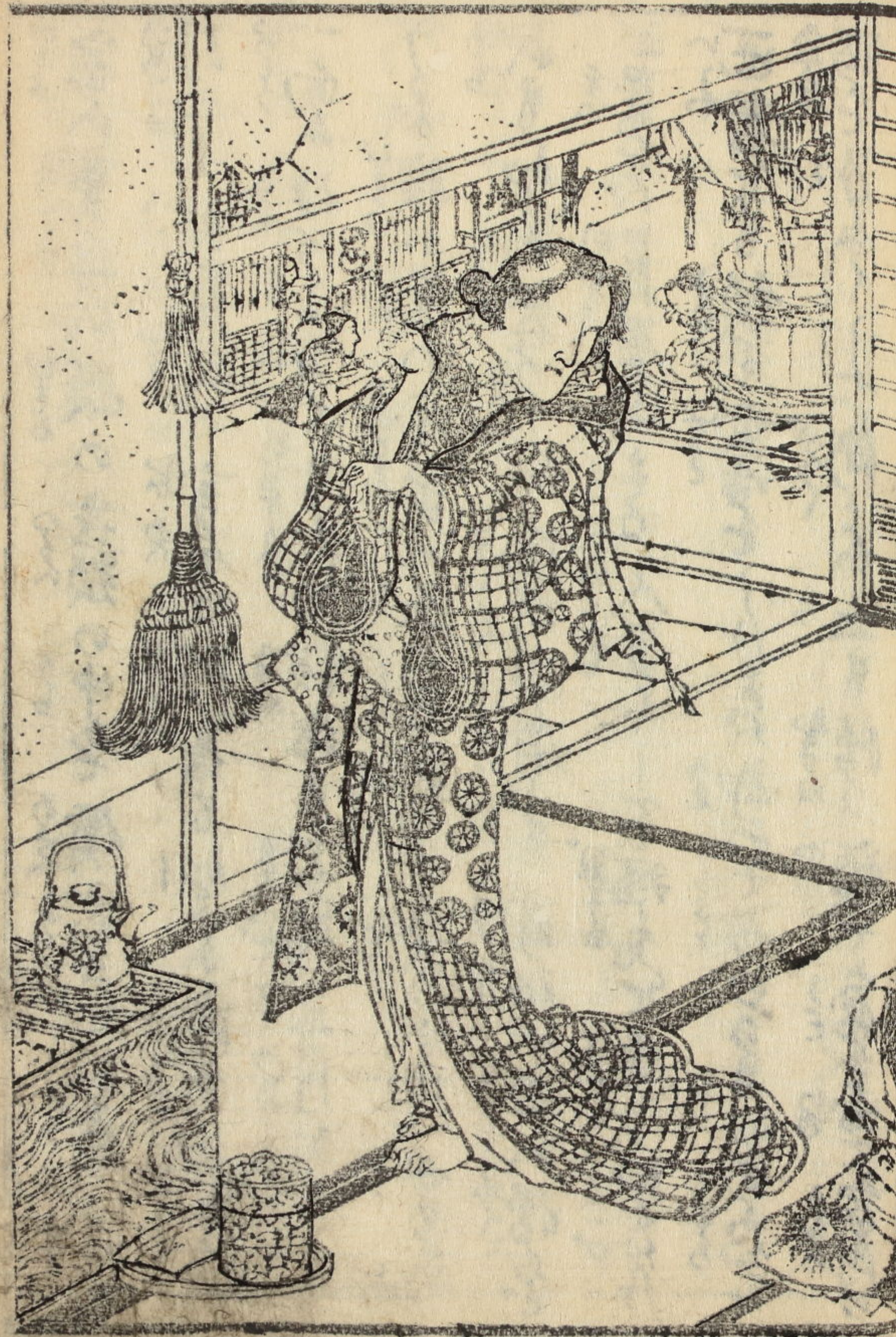
行へ行と兼おきまのり まのり 以賢養の養 まのり のり  
 まのり まのり 以賢養の養 まのり のり  
 送る物が出来るもの まのり 以賢養の養 まのり のり  
 お在の節 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 麻の結 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 至安の方 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 遠く まのり 以賢養の養 まのり のり  
 知る まのり 以賢養の養 まのり のり  
 二百里 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 沙汰 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 ト言 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 まま まのり 以賢養の養 まのり のり  
 ろく まのり 以賢養の養 まのり のり  
 松 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 情 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 ごと まのり 以賢養の養 まのり のり

行へ行と兼おきまのり まのり 以賢養の養 まのり のり  
 まのり まのり 以賢養の養 まのり のり  
 送る物が出来るもの まのり 以賢養の養 まのり のり  
 お在の節 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 麻の結 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 至安の方 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 遠く まのり 以賢養の養 まのり のり  
 知る まのり 以賢養の養 まのり のり  
 二百里 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 沙汰 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 ト言 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 まま まのり 以賢養の養 まのり のり  
 ろく まのり 以賢養の養 まのり のり  
 松 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 情 まのり 以賢養の養 まのり のり  
 ごと まのり 以賢養の養 まのり のり















十月やど 以采あて 田舎とちり 同るのこ 谷所のゆとひ  
村里の家主も 支まへん 不知といひゆ ぬか 葉へのゆと 葉へ  
くそ 種くみ ぬか 葉へ 採一貫ひけきととも 不ぬ 在家とて 葉を  
るもろく 本意るま 月日せりま 中屋敷の方の 音信も  
継母の言ひぬ 不遠 ゆえりか 國へ 移して 後二向ひぬ  
ゆはもぬいと 雪えしと 今人の世の中も 頼母しと 金 尾  
ふりて 後生と 頼ひ 七支の時ぬ 死別 一実の父母の世  
程と 吊る へんと 思ひぬ 亦 近所の 人々の 心を 刺すて

ある 実意と 懐盛の 勢ひぬ 心を 取車しと 一掃する  
清田 醫家 月夜 在りぬ ぬか 葉へ 頼ひ 雪と 欺く ぬか 葉へ  
精ひ ぬか 葉へ 白影の 都て 白鬼ぬ 若るま ぬか 葉へ 今 年十九の  
花の 春 再 賣 山 の 茶 亭 ぬ ぬか 葉へ 梅の 井と ぬか 葉へ 樹方 ぬか 葉へ  
ゆり ぬか 葉へ ぬか 葉へ の 色 梅 橋 湯 の 碎 確 ぬか 葉へ ぬか 葉へ 香 泉 同 ぬか 葉へ  
賞る ぬか 葉へ ぬか 葉へ 香 評 判 ぬか 葉へ ぬか 葉へ 増うと ぬか 葉へ 流 ぬか 葉へ  
一 際 美 羅 見 ぬか 葉へ ぬか 葉へ 財 への 金 ぬか 葉へ ぬか 葉へ 初 日 ぬか 葉へ  
ぬか 葉へ ぬか 葉へ 客 ぬか 葉へ ぬか 葉へ 再 交 ぬか 葉へ ぬか 葉へ 人 ぬか 葉へ ぬか 葉へ

















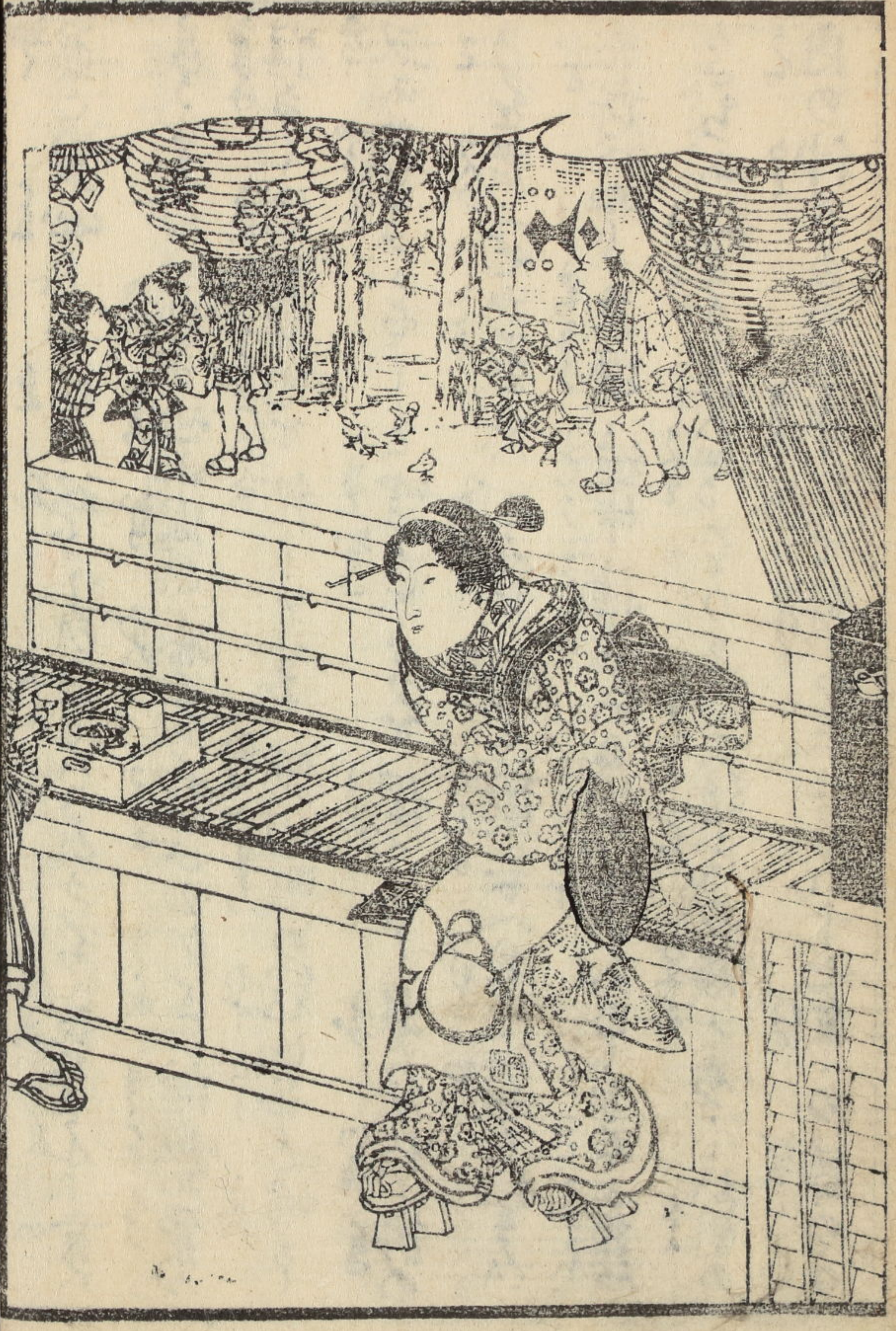


















金銀まう鳥うぐさまぶ 容まう蜘蛛のくまらび喜び  
来るゆり積如此と言ひしを丸人たる者か官の邊を  
護るをうと負し時節をたぐ成路き頼ひもふ汁  
をそ終らんや神と人との懐もあそ大願成程の時ゆ  
へ。備もお堂の負しも十七年の月日をこへ再産  
逢ふもうもる人の便うを初念しとわあわれなる  
家子の安否お父思ひつけける 今日まうて丸圍も  
常くわ合人達の信まよしゆ安あまのり 神佛の

此方便お書のゆりんと日頃山利益及世あうとまの  
世はる 心も親音大志を伏拝し今安あま一王寺の  
境入りも一森原の邊中お名まあ合ひまの力頼  
とまう 意し言念をたうておの人先 聖まの面の町る  
お人形を尋り六し 様よをまわし一なる邊まへ入  
祭補とや入直まのりうと再會んとおの仲お彼見と  
ほびもぐらも脳まき家令釈も家米籠てましくまらる  
まわらるもわら 隙の茶亭へ休居る 酒吞の客



















戯しと云ふまは丸の田の交響の正統と云ふは後をさうく  
火体の隆よまき「イヤ」大いなる響ひり「イヤ」さ「イヤ」せん  
多量運んて「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
おぢいおまは「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
出入りも面創り「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
も停動の隆よまき「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
多くは如路有響ひり「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
危ひるむの「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんもせんも

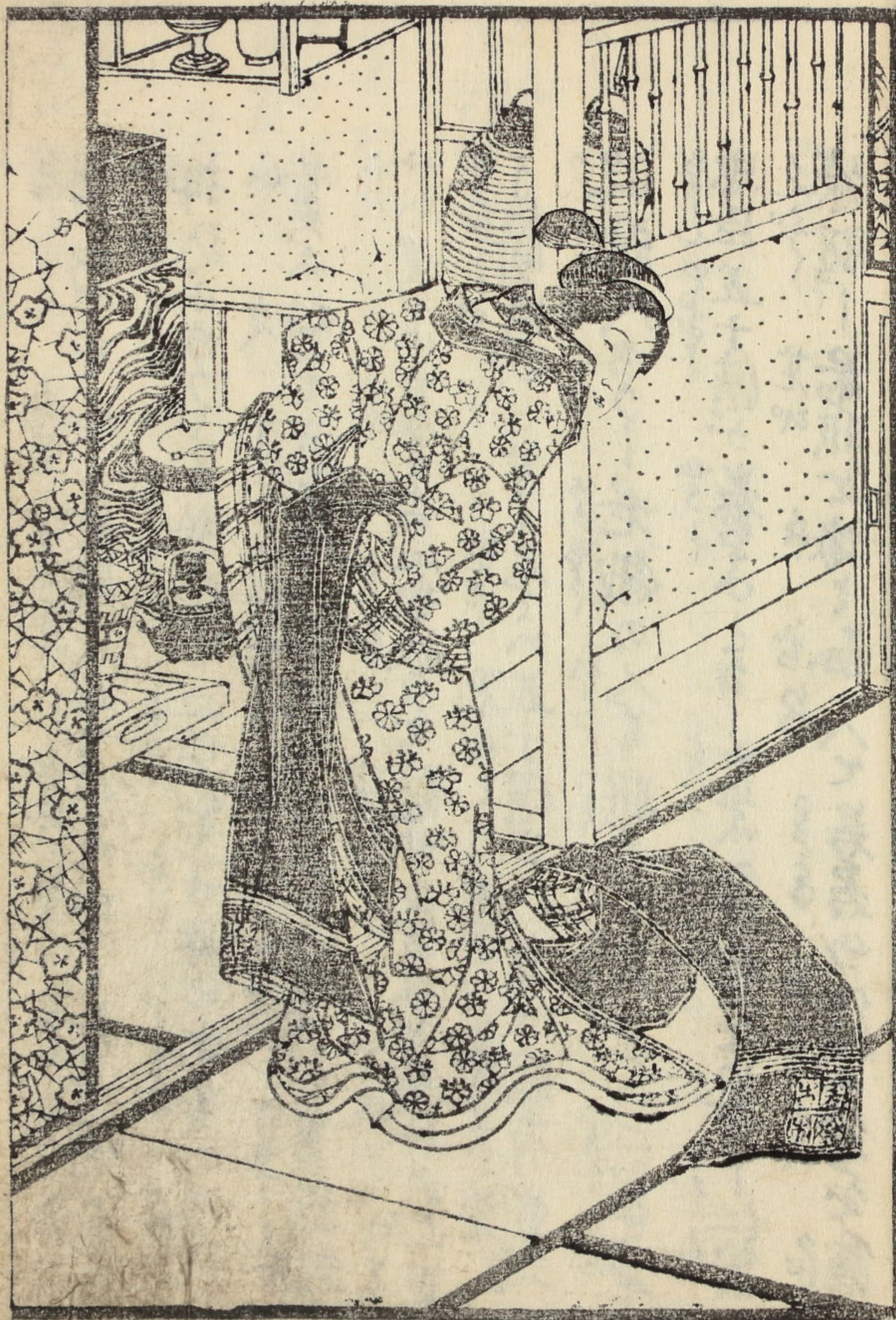
昔の身多きと内門限で  
出入りも面創り「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
も停動の隆よまき「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
多くは如路有響ひり「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんも  
危ひるむの「イヤ」せんもせんもせんもせんもせんもせんもせんも



親会へ。のりあしく。目出度く。と大強き。て後  
人悪人が。七びで。活ら。り。極ふ。出。ま。る。ま。づ。を。極。ふ。た。つ。り  
あ。く。も。り。ひ。が。世。間。へ。出。一。門。へ。も。あ。ま。る。の。極。ふ。あ。ま。る。え  
遠。の。の。人。を。後。悔。を。な。せ。忠。告。の。仲。人。引。入。を。發。り  
か。つ。と。強。動。を。極。や。ふ。鎮。り。て。答。へ。ん。も。怪。我。人。の。ま。さ  
ま。の。極。ふ。ま。る。の。ご。う。ら。何。極。ふ。氣。が。配。ら。う。や。り  
ま。う。く。思。ひ。や。り。も。命。が。縮。る。極。ま。る。極。の。り。ま。り。れ。が  
十。餘。年。以。來。鎌。倉。へ。一。度。も。登。ら。ざ。ふ。居。ら。う。の。う。ち。に

其。方。も。當。の。金。を。使。し。て。思。の。邊。を。み。り。し。果。の  
方。へ。相。後。を。ま。せ。て。思。い。ふ。と。し。ら。ず。も。是。非。は。身。が。極。の  
實。の。の。り。ら。ず。尋。ね。て。裁。を。ま。り。ひ。や  
是。の。人。の。お。業。を。世。為。し。て。み。ま。を。差。せ。し。る。五。十。倍  
氏。の。十。七。年。以。來。主。人。の。使。家。の。一。方。の。ふ。よ。う。と  
傍。の。鎌。倉。を。ま。り。也。國。え。へ。り。國。の。政。の。若。者。を  
守。護。さ。る。た。は。れ。一。日。は。舞。子。由。舞。の。り。勤。ら。其。處  
勤。願。の。り。は。い。は。れ。若。者。の。は。世。に。ま。り。は。極。を。ま。り。ひ。や







思ひを今一筆頭人のせはさし置し清承  
押込みたる老職の二男を其身の忠義の由  
賞の旨を養育の由を伴成りて預りて賞の情  
其のの直直なる家督を継ぎ忠義を教けたる目  
了の同進のせし人々の五十清の仁義を継有覚へ  
彼頭人より老職の人も置ある其身の二男を  
忠臣五十清が養育の由を直家督をゆづり仁義の  
感服し弟派と悔み私入て若君の忠義を成を落

ひがらも千代万代と行せしをぞ

あつた予ぬの不入情なるをいせ成てなすすあ果  
さんかお園人お出を成りあす五十清の方へお果さるる  
あつたお金を私をすはせも園をいせ成てはあ果さん  
尾でお園人さすも押込りるをいせ成てはあ果さん  
再度け地へお出を成りあす五十清の方へお果さるる  
あつた小児も昨夜お坐しやと味川町の冠四郎といふ  
者お親えお果さるるはまらるるのむらあ果のものを















だ 後を遂に借まより發補櫻みりつう王者の奉公の服を  
取つけ合ふ乃びがらう

是迄三冊の物語り初編二編の<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>説き  
り多くゆりて十七年ころ昔の場とまゝ二編の  
まへ<sup>あふん</sup>續く所との<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>混雜して後日あふんと思ひ  
しる<sup>あふん</sup>らん<sup>あふん</sup>劍の<sup>あふん</sup>者<sup>あふん</sup>悔る<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>場<sup>あふん</sup>く<sup>あふん</sup>續解<sup>あふん</sup>する  
極小類ふよこそ  
今その物語りの一件よりまゝ初編の巻中の<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>

と二編の<sup>あふん</sup>説き<sup>あふん</sup>ける<sup>あふん</sup>一<sup>あふん</sup>條<sup>あふん</sup>と<sup>あふん</sup>し<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>教<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>あ<sup>あふん</sup>つ<sup>あふん</sup>り  
せ<sup>あふん</sup>る<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>最<sup>あふん</sup>多<sup>あふん</sup>か<sup>あふん</sup>や<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>依<sup>あふん</sup>き<sup>あふん</sup>王<sup>あふん</sup>者<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>身<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>治<sup>あふん</sup>り  
お<sup>あふん</sup>景<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>亦<sup>あふん</sup>四<sup>あふん</sup>編<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>説<sup>あふん</sup>き<sup>あふん</sup>る<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>も<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>多<sup>あふん</sup>か<sup>あふん</sup>や<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>依<sup>あふん</sup>き<sup>あふん</sup>王<sup>あふん</sup>者<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>身<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>治<sup>あふん</sup>り  
ト

第十八回

鷲 翠青山一<sup>あふん</sup>株<sup>あふん</sup>状<sup>あふん</sup>。湖<sup>あふん</sup>平<sup>あふん</sup>報<sup>あふん</sup>復<sup>あふん</sup>接<sup>あふん</sup>天<sup>あふん</sup>流<sup>あふん</sup>浮<sup>あふん</sup>橋<sup>あふん</sup>衛<sup>あふん</sup>入<sup>あふん</sup>  
蘆<sup>あふん</sup>花<sup>あふん</sup>去<sup>あふん</sup>家<sup>あふん</sup>在<sup>あふん</sup>夕<sup>あふん</sup>陽<sup>あふん</sup>江<sup>あふん</sup>上<sup>あふん</sup>頭<sup>あふん</sup>と<sup>あふん</sup>つ<sup>あふん</sup>ら<sup>あふん</sup>ね<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>は<sup>あふん</sup>も<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>多<sup>あふん</sup>か<sup>あふん</sup>や<sup>あふん</sup>り<sup>あふん</sup>依<sup>あふん</sup>き<sup>あふん</sup>王<sup>あふん</sup>者<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>身<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>治<sup>あふん</sup>り  
ま<sup>あふん</sup>ま<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>一<sup>あふん</sup>軒<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>料<sup>あふん</sup>を<sup>あふん</sup>各<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>邊<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>筈<sup>あふん</sup>より<sup>あふん</sup>東<sup>あふん</sup>の<sup>あふん</sup>を<sup>あふん</sup>渡<sup>あふん</sup>り



















ど一甲舎かやのあまなるあま物ものどか一かアア田舎いんかでもた流り行り  
頃ころえんえんをを望もちののでで居かんでで居まるる所ところへへ行いくくてておお在あるる人ひと  
ト京きやう三さん年ねんのの類るいをを多たくく度ど見み得えるる 京きやう一いち十じゆササ 今いま度どのの  
手て後ごののもも楽らくなるる 後ごへへののににややああののちち只ただ田舎いんかでで  
今いまももやや世よ受うままるるののちちででいいるるにに鎌倉かまくらのの者ものががううるるのの  
利きとと人ひとがが幾いく人にんもも居いるる 信しん切きつのの世よ後ごをを一いちとと思おもははるるううらら  
類るいのの母ははののとといいふふりりやや 小こ一いちアア一いち本ほん三さん 至いた田舎いんかのの人ひと達たちががをを  
使客しやくをを人ひとのの世よ後ごをを一いちとと思おもははるるとと思おもははるるままははるる久くししのの思おもひひはは算さんのの

田舎いんかののおお多たくくへへはは類るいととわわららひひののががあありりままししののちちのの世よ後ごのの  
はは若わか流りゅうががるる幾いく列れつ流りゅうなるるののにに信しん切きつのの世よ後ごをを一いちとと思おもははるる  
ううららひひののちちででああるるののがが思おもははるるとと思おもははるるままははるる久くししのの思おもひひはは算さんのの  
おお地ぢへへ請こ入いりりててもも思おもははるるううららひひののちちのの世よ後ごをを一いちとと思おもははるる  
ああままりりんんととももああるるままははるる 京きやう一いちアア一いちササ直ちよくのの腹はらをを食くうう  
因よににおお地ぢのの後ごのの思おもひひももああるるヨヨ 京きやう一いちヨヨククのの  
第だい一いち身みがが浮うききままししるるががああるる 小こ一いちアアののちちのの世よ後ごをを一いちとと思おもははるる  
當あ時ときのの世よ後ごをを一いちとと思おもははるるとと思おもははるるままははるる久くししのの思おもひひはは算さんのの







おれが居るせ見で帰る直ふま時小方の邊で言傳  
あつと教ひの公發ほど知らぬ顔の酒を吞む居る  
酒を呑む居る小 赤まん 秘まや 今目おちぬ相傳せ  
さるまが有るがまゆそお居る 京ハテナ有陸なるり  
言伝きしうは三の中あまのるふ何ぞ能相傳の口も  
おれ居るこのろ 小ハアレサま極る居る 疑ぶつとあ言でま  
彼屋とあお極小を居る 赤傳ま言ふけまども何  
振人が何と言そ 居ても 一生お居極小 離別るひ

出来さひヨまざけまどもお居のちつとお在の通う六ヶ  
お人多まげん 何んが隠居もくおを固くあそ金を都合ま居る  
何年まももあ居とんの 劍へ初更が出来さひのま  
おの母人の附人が出来て居るものさうつと何れハま  
何れまもも言を言まもあも何れハの極も有る  
京ハそを母人が何れまもとらふのど 小ハ上は極せし  
外ハ何れまも何れまも何れまも何れまも何れまも  
何れまも何れまも何れまも何れまも何れまも



どく 毒ぶら 今もその 後ふ 二箇 ありつゝ 出して 世の ちぢ  
ま 小輩 活業 あり して 仕ま せ ね け ぬ け ぬ 率  
と 一 箇 あり して 五 十 兩 都 合 して 居 る 然 して  
口 金 一 箇 あり して 五 十 兩 都 合 して 居 る 然 して  
地 と 買 取 せ ば 一 箇 あり して 五 十 兩 都 合 して 居 る  
どう せ 世 後 一 七 年 あり して 人 び の 世 び 其 人 び 世 び  
腹 の 魂 文 を 後 一 七 年 あり して 再 度 世 び 合 方 び 世 び  
養 母 び 一 七 年 あり して 判 を 居 る 清 人 び 世 び

道 び の 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して  
一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して  
京 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して  
一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して  
一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して  
一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して  
一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して  
一 七 年 あり して 一 七 年 あり して 一 七 年 あり して







